子ども未来学研究　2009年　第4号　pp.67-70

地域社会の教育環境づくり

――通学合宿の取り組みから――

徳　永　幸　枝

要　旨

子どもの数が減り、核家族化や少子化が進む中、子どもたちは家庭で手伝いをする経験が少なくなっている。通学合宿は、そうした日常体験を補う試みとして注目されている。通学合宿は異年齢の子どもたちがセンターなど地域の施設で集団生活を送りながら学校に通学するものである。合宿に参加した児童は友だちが出来、もらい湯等、地域の人との交流も楽しかったと、集団生活の中で、コミュニケーション能力や協調性や社会性を身につけていく。この取り組みは地域の活性化に一石を投じた結果となり、学校と家庭、地域との連携した活動となっている。

キーワード：地域社会の機能，日常生活体験，通学合宿，コミュニティ

はじめに

学校週5日制の導入以来、子どもたちが学校にいる時間が少なくなった。その分の時間は、家庭や地域社会、あるいは公的機関が子どもに関わらざるを得なくなってきている。子どもの日々の生活は学校、家庭及び地域社会の3つの場を中心に展開されており、教育もまた、それらの3つの場を中心に行われる。したがって、一人ひとりの子どもの豊かな人間性の育成を図るためには、学校、家庭及び地域社会がそれぞれの教育機能を十分に発揮して、相互に連携を強めることが大切である。

本来、子どもの教育は「学力」をつけるために学校が「しつけ」の部分を家庭が担当し、「モラル」を地域社会が教えていた。しかし、現実的には家庭・地域社会の急激な変化により、それぞれの教育力が低下してきている。そんな中、地域の方々が子どもの健全育成の一環として、「通学合宿」という取り組みを提案され、前任校で実施した。宇部市藤山校区にはコミュニティの活動が活発で、組織も出来ている。コミュニティには福祉、美化環境、安心安全、子ども、人・ふるさとづくりの5の専門部があり、それぞれ年間計画を立て、実施しておられる。その一つである子ども専門部の活動として、学校・子ども会・ＰＴＡ・おやじの会等の協力により実施した取り組みである。

「通学合宿」は昭和58年度から福岡県の庄内町で始まり、現在では全国に広がっている。子どもの生活体験を豊かにすることを目的に日常体験を補う試みとして注目されている。

通学合宿は日常生活の延長であり、家をはなれて集団で生活をし、学校へ通いながら食事、洗濯、入浴等生活そのものがプログラムとなっている。食事は自分たちで献立を立て、買出しから

調理、片付け、入浴もご近所にもらい湯をし、日常生活の体験を通して子ども達を地域の一員として育てて行こうとする取り組みである。

1　地域社会の機能のとらえ直し

近年、家での巣ごもり現象や学校外の学習活動に通う子どもの増加などにより、地域社会においても子どもたちの人間関係が希薄化している。しかし、地域社会では異年齢集団の子どもたちが一緒に遊ぶことにより、年上の子は年下の子への思いやりや必要に応じて手心を加えること、また、年下の子は年上の子への尊敬、感謝の念などをごく自然に身に付けることができるなど、人間として必要な社会性を切磋琢磨することができるというよさがあった。さらに、地域社会には、高齢者、成人、青少年、乳幼児など様々人が居住していることから、地域行事への参加等具体的な活動を通して世代間の交流をすることが可能となり、家庭や学校教育では得られない学習の成果が期待でき、そこで学んだことが基となり、学校での学習が広がることも期待できる。単に、地域の行事等に参加するだけでなく、活動づくりに加わり、地域の人と一緒に進めていけるような取り組みが必要である。

2　通学合宿の取り組みを通して　（通学合宿のしおりから抜粋）

宇部市藤山子ども委員会の実践事例から

（平成18年10月1日～10月4日3泊4日　4・5年生　30名参加）

（1）通学合宿とは

子どもが学校に通いながら、ふれあいセンターを利用して、一定の期間、異年齢の集団の中で共同生活を営み、日常生活における作業を自力でやり遂げる体験活動で子どもの自立と自律を図る。1日の生活のスケジュールは子ども自身が立てる。

（2）通学合宿の目的

情報化社会の中で、現在のこどもたちは博学で知識も豊富で雄弁であるが反面、体験や経験をしなければ身につかない大切な能力の不足が指摘されている。そんな子ども達に、日々の生活を自分達の力で作り出す体験の場を与えて、子ども達に自主、自立、協調、感謝、思いやりの心、地域への所属感等、生きて働く力を持った『感性豊かなたくましい藤山っ子』を育成する事がこの合宿の目的である。この合宿で子どもたちに感じてほしい事は①親のありがたさ　②家庭のありがたさ大切さ　③家庭内での自立と責任の自覚　④地域の人々の温かさ、所属感である。

直接体験の中でも子どもたちに、とりわけ不足している「生活」に関する基本的な知識、技能、習慣（生活体験）の補填を目指す。

また、この通学合宿は地域住民も関わることにより、子ども同士はもちろん、大人も含めたコミュニケーションを通じて住民の交流や協働性も深まり、まちづくりに繋がることが期待できる。

（3）通学合宿で学ぶことは

【子ども】

体験を積むことで新たな発見があり、自信や積極性が身に付く。

・基本的な生活習慣（あいさつ、礼儀、時間厳守、起床、就寝、食事準備、片付け等）

・共同生活の態度（交流、協力、ルール、規律など）

・自主性、積極性（リーダー性の高まり、自発的な行動など）

【大人】

・家庭生活や親子関係を見直すきっかけとなり、子育てに役だつ。

・地域で子どもを見守ることにより、地域の教育力を高める。

（4）キャンプとの相違点

集団生活の態度を学ぶという点ではキャンプとよく似ている。異なる点は日常生活を行い学校に通うことである。勉強（宿題）や遊びを共にし、起床から就寝まで、食事の買出し、炊事、片付け、入浴、掃除など、日常の生活習慣を基本として、1日を自分たちの生活リズムにあわせて行うもので、家事の要領が身に付き家庭での自分の役割、家庭生活の振り返り等、毎日の生活への影響が大である。

（5）1日のスケジュール

時　間	活　　動	気　　づ　　き
6：00	起床・洗面 部屋の片付け 朝食準備	・寝具の片付けが苦手 ・自分のもの（衣類、学用品等）の片付けに時間がかかった。 ・朝食のメニュー例　　ハムサンド・キュウリサンド・卵サンド・紅茶・牛乳・味噌汁・ごはん・納豆・いり卵等
7：00	朝食・後片付け 登校準備	・学習の準備が苦手
8：00	登校	・学校で過ごす。 ・この間は塾等習い事もすべて休む。
16：30	下校 買出し	・近くの「スーパー」へ夕食・朝食の材料を買いに行く。 ・1日一人分500円で設定、米は持参
17：00	夕食準備	・メニューによってはまったく別の物になったり、出来なかったりした。 ・時間内に出来ない班もあった。
18：00	夕食 後片付け	・夕食のメニュー例 ポテトサラダ、三色コロッケ、菜めし、オムライス、豆腐白玉団子、ミートボール、チーズのせハンバーグ等 夕食の時間内に終わらないことが多かった。
19：00	入浴	・近所のお宅にもらい湯に行く。 ・子どもが来るとどの家庭も大歓迎で風呂上りの会話がお互いに楽しかったようで、このもらい湯は子どもにも大人気であった。
20：00	自由時間 学習 レク活動 体験発表会(最終日)	・宿題をする。 ・自由時間の企画、手品・リサイクル作品づくり・理科実験体験・ゲーム・クイズ等地域の団体の方がたのしい企画を準備しておられた。
22：00	就寝	・20人ずつのごろ寝状態であったが、みんな楽しく過ごした。

（6）アンケートの結果から

通学合宿に参加した子どもたちは8割が大変だったけど楽しかったと答えており、「新しい友

達ができた」「食事の準備が大変だった」「時間を上手に使って過ごすことができた」「もらい湯でよその家のお風呂に入れたことが楽しかった」「家族のことや、家の人に会いたいと思った」等の回答があった。子どもたちは劇的に変化するわけではないが、親のアンケートでは「しっかりしてきた」「自信がついたようである」「積極的になった」「手伝いをするようになった」等肯定的回答も7割あった。地域の大人の意見は「子どもはきちんと教えれば何でもできる」「子どもは褒めて成長させなければならない」等、躾の大切さの指摘が多くあった。また、「あいさつができない」「かたづけができない」「規律ができていない」「ことば遣いが悪い」等子どもの実態から、もっと地域や大人が子どもに関わる場をつくる必要性も認識され、今後もボランティアとして参加したいという回答が7割あった。地域の方は子どもと関わることで、子どもの素直さや明るさ、元気さ等良い面を見て、自分達の住む藤山校区をよくして行きたいという思いを新たにされたようである。

おわりに

前任校で地域の方と取り組んだ通学合宿も21年度で4年目を迎え、内容も充実し、参加希望者も多くなってきている。毎年参加したいと希望者が増え、抽選で決めている実情である。家庭で手伝いをする経験の少ない子どもや集団の中で他者とかかわる経験が乏しくなっている子ども達にとって、貴重な体験となっている。子どもたちが健やかに成長するには知識だけではなく、日常生活で体を動かしていろいろなものを見て、聞いて、触れて、実際にやってみることが必要である。その事からしても、通学合宿は、子どもにとっては楽しいけれど、思い通りにならなかったり、やりたいことができなかったり、食べたいものが食べられなかったりと嫌なことや我慢しなければならない場面が多くあるが、出来た時の達成感や成功感が実感としてあるためか、我慢が必要な苦しい体験を好んではいないが、決して逃げてはいない。子どもは一つの体験きっかけに、さまざまな方向に興味のアンテナを伸ばし、自分で考え、判断する能力を培っていく。また、集団の中でコミュニケーション能力や人間関係などを身につけ、協調性や社会性、忍耐力を育んでいく。この体験は子ども達の可能性を伸ばし世界を広げ、生き生きと成長するきっかけとなると考える。「綾の共育論」の著者である浜田倫紀氏は「地域社会が生き生きとして子どもがすくすく育つ町づくりは『自治公民館活動』である」と断言している。藤山校区の取り組みは、まさに、大人も子どももそれぞれが成長していこうとする「共育」の姿である。

引用・参考文献
藤山校区子ども委員会編　　通学合宿要項　2006年
浜田倫紀　「綾」の共育論　　評言社　2002年
庄内町福祉の里づくり推進協議会編　　1998年
「子どもが生きる力を育てる　生活体験学校の日々　――福岡県庄内町のこころみ――」